様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６６６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４６０６３７

研究課題名（和文）医療面接実習において学生が行動変容を来たす模擬患者のフィードバック手法の特定

研究課題名（英文）Analysis of learning process and impact of medical interview training with simulated patients

研究代表者
阿曽　亮子（Aso, Ryoko）

日本医科大学・医学部・助教

研究者番号：９０１８４１７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：模擬患者（SP）参加型医療面接実習の体験が、医学生や卒後医師に、どのようなインパクトとして残っているか、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。
卒後医師及び学生に半構造化面接を行い、M-GTAを用いて質的に分析した。
医学生は「こんな細かいとこまで」とSPに反発し、後に「実は自分も家族にこういうことがあって、SPをやるようになったんだ」と聞くと、徐々にSPの発言の意味に納得していた。医療面接スキルの修得だけではなく、実習中に起こった様々な葛藤を経て成長していた。SPを通してその人生経験を感じて、言われたことに納得・行動変容し、患者－医師間の信頼関係の大切さの理解に結びついていた。

研究成果の概要（英文）：To explore the process of how students learn from the medical interview training and what practical influence it may have on clinical practice, we interviewed graduates and students. Doctors and students who underwent interview training were surveyed using semi-structured interview. Interviews were analyzed qualitatively using the M-GTA.
The following represents a typical example of the graduates' experience. Although motivated to undergo interviews with SPs, one medical student expressed anger at being warned about the dress code and said this warning was too strict. But on another day when the SP revealed that their relative was hospitalized, the student re-evaluated the saying and accepted it. Our study focuses on the process of learning, behavioral changes, and the students' thoughts about the universality of the experience of SP advice. This reflected good communication and the establishment of confidence between the interview-patient and doctor.

研究分野：医学教育

キーワード：模擬患者(SP)参加型実習　医療面接　質的研究　修正版M-GTA　SP養成

１．研究開始当初の背景

2005年、共用試験OSCEが本格実施され、その中の「医療面接」技能を修得するために、模擬患者（Simulated patient, SP）参加型医療面接実習（以下 SP 実習）は多くの大学で実施されており、医療面接技能修得のための有用性が指摘されている。しかし、医学生がこの実習から学ぶ過程を内面も含めて具体的に分析した報告はない。特に卒前にこれらの授業を受けた学生が、医師となった立場から振り返り、その後どう影響するかに関して報告したものはない。

２．研究の目的

日本医科大学では、2004 年度から独自に模擬患者（SP）を養成し、SP 実習を行なっている。それから 10 年が経過し、この教育が学生にどのように受け取られ、どのようなプロセスで行動変容するのか、学生から聴き取り調査をすることによって、解明しようとした。

本研究では、卒後医師及び SP 実習直後の学生が振返った時、SP 実習体験がどのようなインパクトとして残り、臨床実務や臨床実習にどう生かされているか、そしてそこに至るプロセスを明らかにすることを目的とした。

表　SP 参加型医療面接実習の構成

内容	シナリオの種類・内容	回数	SP 人数
医療面接の基礎	身だしなみのコメント、腰痛、腹痛など	3	20-35
内科系デモンストレーション	医療面接のデモを見て、今後の授業の進め方を理解する	1	15-20
内科系シナリオ	胸痛、不整脈、頭痛、胸焼け、血痰など	3	15-20
		3	15-20
高齢者 女性 乳児	物忘れ、腹痛、発熱・発疹	3	12-20
精神科	憂うつ	1	12-20
糖尿病の検査結果説明	検査結果の説明、入院の説得	1	12-20

３．研究の方法

１）SP 実習の背景と設定

日本医科大学では 2004 年度から基本臨床技能習得のための 4 年次の 2 か月間の実習中、3 時間の SP 実習を 10 回行った。その構成は医療面接の基礎を 3 回、内科系シナリオ 4 回、高齢者・女性・乳児のシナリオを各 1 回である。精神神経科または糖尿病の検査結果の説明のシナリオを実施した年もあった。学生は約 100 名が同時に行うが、内科系の 3 回は半分の約 50 名で行う（表）。参加 SP 数は各回 12 名～35 名で、教員は 2 名が担当する。学生は SP の人数に相当するグループ数に分かれて、模擬医療面接の後、医師役学生の振返り、患者役 SP のフィードバック、同級生観察者のフィードバック、及び教員から全体のフィードバックを順に行った。

グループ分けは、1 学年 100 人がなるべく多くの同級生と組むことができるように毎回ランダム化して行った。SP のグループ間の移動や時間配分は SP 養成者の補助の下で行った。

２）研究参加者と倫理的配慮

参加者の選択基準は本学のこの SP 実習を経験した、①卒後 1～8 年目の医師、及び②4 年次にこの SP 参加実習を経験した後、臨床実習を 3 か月経験した 5 年生である。研究の趣旨を説明し、承諾した者が参加した。本研究は、日本医科大学倫理委員会の承認の下に実施した。

３）インタビュー

研究目的、インタビュー実施方法、内容の分析と報告は匿名で行われることなどを説明し、文書でインフォームドコンセントを得た。卒後医師とのインタビューは各々約 1 時間で、5 年生はフォーカスグループインタビューにより各グループ約 1.5 時間で実施した。半構造化面接を行い、質問項目は実習で印象的なこと、面接の内容、同級生や SP のフィードバックで覚えていること等である。会話は同意を得て録音し、逐語録作成は専門業者に依頼、その後筆者が内容を確認した。

４）分析

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA)を用いて RATS（Guide to peer reviewing qualitative manuscripts）をも参考にして逐語録の質的分析を行った。M-GTA は医療社会学者 Glaser と Strauss の分析方法をより理解しやすく、かつ活用しやすいように木下により開発された方法である。日本でも、看護、保健、医療、社会福祉、教育、臨床心理など、多くのヒューマンサービ

ス領域で用いられている。

４．研究成果

１）卒後医師は 6 名が参加した。分析で明らかになったストーリーラインの大きな流れは以下の通りである。

卒業生は SP 実習中、SP の存在に緊張しながら、SP に言われたことに反発や、悔しさ、不安など、心理的葛藤が生じたりしていた。その後 SP の人生経験や医学教育への想いを感じて、言われたことに納得・行動変容し、患者－医師間の信頼関係の大切さの理解に結びついていた。例えば、「こんな細かいとこまで」と SP に反発し、後に「実は自分も家族にこういうことがあって、SP をやるようになったんだ」と聞くと、徐々に SP の発言の意味を納得していた。医療面接スキルの修得だけではなく、実習中に起こった様々な葛藤を経て成長していた。そのような気付きがあり行動変容する過程と、それがその後の患者－医師間の信頼の重要性の認識につながっていることが学習者側の立場から明らかになった。また実習中に考えていた理想的な医師の姿と現実の違いを認識し、患者から信頼される関係の構築に努めていた。SP からの指摘を今でも覚えて気を付けていた。

今後の SP 養成及び SP 参加型実習を実施する上で、SP がフィードバックすべき点及び表現方法を習得する上で重要なポイントを示すものである。

２）SP 実習終了直後の 5 年生は 12 名が参加し、3 組に分かれてフォーカスグループインタビューを行った。分析で明らかになったストーリーラインの大きな流れは以下の通りである。

医学生は、SP 実習中真正性の高い演技を行う SP と緊張感を持って練習し、医療面接スキルを修得した。SP による観察を感じつつ、期待に応えようと真剣になっていた。そして SP から言われたことや、同級生同士の観察や指摘のやり取り（みんな最初は言いにくかったけど、徐々に。相手に駄目出しをする仕方は練習になった）を体験していた（結構いい経験なのかなって。実際 BSL とか回ってると、同じ年代の先生同士で指摘し合ってることも結構あるんで）。実習終了時には達成感を感じ、身だしなみや信頼関係構築の大切さを理解し、臨床実習で持つべき力だと実感していた。その後の臨床実習では、その基礎を応用する一方、先輩医師を見て学ぶテンプレートとして有用性（うまいなって思った時にコツをつかもうとしたら、テンプレートがある方が、「この先生、こんな時にこんなことを言ってうまいな」と具体的に拾える。）も感じていた。

医学生は、現場に近い疑似体験の緊張感の中で医療面接スキルを修得した。そして同級生と互いに学ぶことにより、学びを促進し合う環境ができた。SP からのフィードバックや、同級生を観察し指摘することで得た観察眼は臨床実習において先輩医師を見る目につながっていた。

以上、学生、卒業生共に今でも SP 実習中の学びを現在に生かしていること、そしてその学びのプロセスが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　4 件）

① Aso R : Evaluation of medical interview training with simulated patients (SPs) by graduates of Nippon Medical School (NMS). 13th International Conference on Communication in Healthcare (2015 ICCH), Medical Encounter, 30(1), Winter 2016, p121, http://www.aachonline.org/Portals/36/Medical%20Encounter%20Archives/AACH_MedicalEncounter_Winter2016_FINAL.pdf, (2015.10.25.) 査読有, (New Orleans)

② 阿曽亮子: 日本医科大学における模擬患者（SP）参加型医療面接実習の卒後医師による評価. 第29回医療コミュニケーション研究会, 2015.12.06 招待講演(名古屋).

③ 阿曽亮子、大西弘高、藤倉輝道、吾妻安良太:参加型臨床実習(clinical clerkship: CC)中の医学生は臨床前の SP との医療面接実習をどう振り返るか.医学教育 46Suppl. P111 (2015.7.24) 査読有, (新潟).

④ 阿曽亮子、大西弘高、藤倉輝道、吾妻安良太: 日本医科大学での SP 参加型医療面接実習が卒後に与えるインパクトの分析. 医学教育 45Suppl. P118 (2014.7.18.) 査読有, (和歌山).

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

阿曽 亮子（ASO, Ryoko）

日本医科大学・医学部・助教
研究者番号：90184176

(2)研究分担者
大西 弘高（ONISHI, Hirotaka）
東京大学・医学（系）研究科（研究院）・
講師
研究者番号：90401314

藤倉 輝道（FUJIKURA, Terumichi）
日本医科大学・医学部・教授
研究者番号：00238552

吾妻 安良太（AZUMA, Arata）
日本医科大学・医学部・教授
研究者番号：10184194

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：